

神鍋のウスバシロチョウの分布調査 I

足立 義弘*・谷角 素彦**

はじめに

この調査を行うきっかけになったのは、昨年(1980年)、神鍋の数ヶ所でウスバシロチョウを目撃したことである(足立,1981)。目撃したのは何れも近くに林を伴った草地で、このような環境は神鍋の至るところに見られた。したがってさらに調べるならば、他にも新たな場所で同じようにウスバシロチョウを確認できるのではないかと、この期待を抱いた。

そこで今年(1981年)は、神鍋のウスバシロチョウの分布状況を明らかにすることを目的に調査を行った。この報告を行うとともに、今後の課題と問題点も提示しておきたい。また、ウスバシロチョウの食草であるムラサキケマンについても分布調査を試みたが、ここで結果をまとめるには至らなかった。

なお、この調査は但馬むしの会と豊岡高校生物部とが合同で行ったもので、参加者は26名にも上った。このようなやり方は我々には初めての試みであり、単に短期間に調査が実施できたということにとどまらず、“会”あるいは“クラブ”の機能を充分とはいえないまでも活かすことができた。さらに、各人が共通した目的のもとに参加し、これらの調査結果を踏まえたうえで互いに意見を交換し合うなど、個人レベルでは得難い成果があった。参加された皆さんの熱意と行動力に敬意を表したい。

また、大阪市立自然史博物館の日浦勇先生には、多忙のなか貴重な時間を割いて頂き、今後の調査に対するアドバイスを頂いた。感謝したい。

神鍋の概要

神鍋は兵庫県北部の日高町西部に位置している。一帯は、北西に三川山(888m)、南西に蘇武岳(1074m)、東に大岡山(664m)などの山塊を控えていて、一見小さな盆地状をなしている。しかし、神鍋各地の標高を見ると一様ではない。栗栖野(340m)から北側と北西側が平坦な地形であるのに対し、栗栖野・東河内(360m)ラインの西にある大机山(494m)と神鍋山(469m)が丘陵状を呈し、神鍋山の南山麓から名色(300m)にかけて緩かな傾斜となっている。さらに名色・太田神鍋(290m)ラインより南東方向の栃本(210m)、山宮(190m)、そして

* 現住所 〒616 京都市
** 現住所 〒567 茨木市

石井(136m), 傾垣(140m)にかけては、やや急な傾斜となっている。神鍋山は数万年前から1万年前に活動していた火山で、この南東方向の傾斜地帯は溶岩流を主体とした火山性の地形である。

神鍋はスキー場として有名だが、最近ではテニスコート、別荘地等の建設も進められている。しかし、全体としては畑地と林が多くの面積を占めている。

調査の結果

調査は5月23日と31日の両日に実施した。23日は、11時より16時にかけて5名が2班に分かれた。31日は、9時から14時まで21名が5班に分かれた。調査地点はルート沿いに設定していき、そこで任意の瞬間で見かけた個体数を4段階の記号に置き換え、調査表^{*}に記入していった。

調査は神鍋のほぼ全域にわたる123ヶ所で行った(図1)。一部に未調査の地域を残しているものの、今回の目的からすると満足できる結果であった。図1を見ると当初の予想どおり神鍋の広範囲でウスバシロチョウが確認された。もう少し詳しく見ると、成虫が最低1頭以上確認されているのは計107ヶ所で、全調査地点123ヶ所に対する割合は約87%と高い率を示している。また、10頭以上確認された個体数密度の高い地点も、神鍋全域に分布している。

次に地域別に見ると、神鍋山から南東の地域では、林の周辺と畑地を中心に多数の地点で確認されている。神鍋北部と西部の山沿いや谷でも多くの地点で確認されている。逆に、栗栖野から北西部に確認できなかった空白地帯があり、神鍋東部の山沿いにも空白地点がある。

今回の調査の経験からするとウスバシロチョウが多く見られたのは、放置された畑、田畑の周りや林縁部の草地、カキ、クリなどの木立ちの周辺である。人家周辺の観賞用植物や農作物の花でも多く見られた。少なからずいたのは、よく整備された広い畑、低木層や下草が密な林内、広い水田地帯である。また、山林を切り拓いて作ったスキー場の草原にも少なからずいたようである。

以上、今回の調査からウスバシロチョウは場所によって疎密の差はあるが、神鍋一帯に広く分布し、全体として個体数も多く、安定した棲息をしているものと考えられる。

* 調査表には、環境欄と備考欄も設け、ウスバシロチョウの棲息環境や生態記録も把握しようとしたが、副次的なものとして扱い記入方法の統一もしていなかったため、正式なデータとしての使用は控えた。

神鍋のウスバシロチョウの分布調査Ⅰ

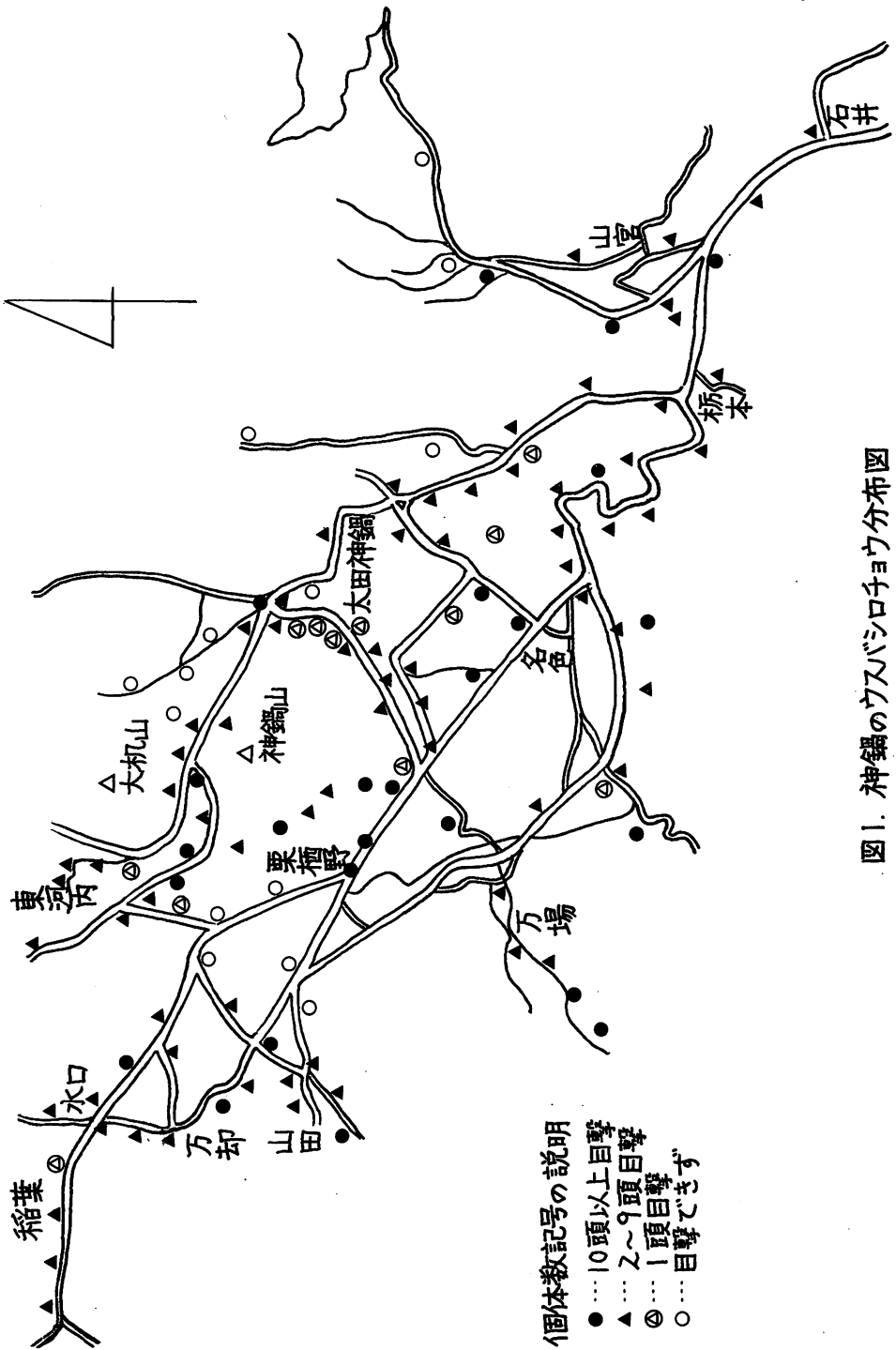


図1. 神鍋のウスバシロチョウ分布図

おわりに

これまでの我々の認識では、ウスバシロチョウは谷合いの開けた場所や集落周辺に局地的に分布するというのが一般的であった。ところが、今回の調査で神鍋一帯には、一般認識をくつがえすべく広い分布域があることがわかった。前者を点あるいは線的分布と考えると、ここでは面的な分布をしているのである。

以下に今後の調査へ向けて問題点を整理しておく。

1. 神鍋ではウスバシロチョウがなぜ広範囲に面的に分布しているのか。これは神鍋特有の地形や地質と、それに起因する土地利用法などと結びついていることが原因していると思われるが、その関係を示すことはできないか。その手始めとして、ウスバシロチョウ棲息地の環境を具体的に表わせないものか。
2. ウスバシロチョウの発生地を確認すること。今回確認したのは、あくまで成虫の棲息(活動)場所であって、発生場所とは限らない。これに伴い、成虫の生活空間の広がり、即ちどの程度の移動が行われるのかを明らかにできないか。また、雌雄の行動パターンにちがいはないか。
3. ウスバシロチョウとムラサキケマンの精度の高い分布図を作成し、その対応を調べる。

以上、主なものを挙げてみた。この他にも、訪花植物の調査や幼虫1頭がどのくらいのムラサキケマンを食べるのかといった食性の問題、1日の活動時間帯や発生期間の問題など、興味深い調査事項がある。

最後にこの調査に参加された方々の氏名を記しておく(アイウエオ順)。

足立義弘、安東正敏、稲葉浩介、稲葉由加利、小川宏人、加野正、木下賢司、河本浩一、小西照、小林澄人、小山五月、鹿田輝明、島田真輔、嶋田勝、高階安司、高橋匡、谷角素彦、津田浩司、中尾新、中嶋正博、中西利津子、藤原泰輔、丸山絵史、村上公子、村尾和敏、柳沢和男

参考文献

足立義弘, 1981, 今年の観察のなかから, IRATSUME 5: 73-75